

カクマ キャンプ (ケニア)

1997年ワークキャンプ 職業訓練棟建設



ドンボスコのディシャブ
をももらって遊ぶ

ヘッドカウンティング
(人口調査) 中の高橋さん

作業に励む一学生

昨年寄贈した車が
はるばるタンザニア
経由で到着していた



キボンド キャンプ (タンザニア) タンザニアのブルンジ難民キャンプに送った古着は役立っています。

段ボール箱960箱と墨田区から提供されたカンパン250ケースを40フィートコンテナに積んで、6月末に出航し、8月にダルエスサラムに到着しました。7月から9月末まで3ヶ月、ボランティアとしてキボンドキャンプに滞在していた高村さん(東大3年)が、3日があり、ダルエスサラムまで出向けトラック積みかえに参加し、今度は4日かけて大型トラックで難民キャンプまで運びました。

キボンド最後の夜

高村 憲明

Kibondo最後の夜。Jesseはほくに言った。「これまでの滞在で難民キャンプがどんなものかわかったと思う。今は比較的落ち着いている。しかし、ひとたびブルンジで戦争が起きれば、一日に何千人という規模で難民が押し寄せる。そして一日に何百人という人が死ぬ、もしくはそこに寝る場所と水と食料がなければ・・・だから我々は今、緊急用に新しいキャンプを作っている。これからは、我々は君たちの支援を必要としている。」

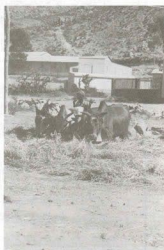
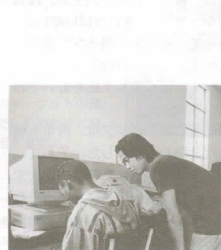
彼らも、国連も、誰もブルンジの戦争を止めることはできない。しかし、戦闘が起き、多くの人々が故国を追われて来たとき、彼らはその人々を助けることができる。彼等にもできることがあり、できないことがある。そして彼等ができることを、でき限りやっている。ほかにもブルンジの戦争を止めることは決してできない。また、難民の人たちを直接支えることもできない。しかし、日本にいてもできることはある。何気なく送った、たった一枚のTシャツが難民キャンプでは死ぬほど必要とされたりする。

タンスの奥の一枚の古着、玄関にころがる一足の靴、そんな物を心から欲する人々がいる。Kibondolには7万人、タンザニア全体で、40万人、世界では2000万人。日本にいてもできることは少なくないと思う。”できることを、できる限り”これを続けていきたい。



アフリカで一番新しい国エリトリアでコンピューター訓練校開校!

岡安さん(早稲田3年)は大学を休学して、春から準備にあたり秋葉原に出かけてプリンターをはじめコンピューター関連器材の購入も一緒に行いました。5月には50台のコンピューターを送り、6月末にエリトリアに入り、受け取りと開校の準備にあたりました。私たちの支援がなければ決してコンピューターに触る機会もなかった青年たちです。進歩が自分の目で確認できるコンピューターは大変いい支援プログラムだと実感しました。1、2年後、彼等が就職するとき、このコースがどのように役立っているかを見るのが楽しみです(松木)



そして驚かされるのは、この状況にあって、治安が驚くほどいいこと。4ヶ月住んでみて、日本よりも安全という感じがする。独立を自らの手で勝ち取ったという誇りがそうさせるのだろうか。なにより、今世紀占領されてなかった時がほとんどなかったという国である。街中いたるところに、「Free Eritrea!」のペインティングが塗られ、祭りになると、子供から、スーツを着た紳士風の人から、おじいさんまで、「今、俺メチメチメチのいぜー!」って踊っているのは、見ていて微笑ましかげり。みんな、自由というものを初めて実感して、それがこれほど素晴らしいものだとは!という気持ちでいるんだ。と聞かされた。これもまた、聞いた時には衝撃だった。自由なんて当たり前すぎて、それを感じたことなんてあったのだろうか?とにやにや、こちらにきてこんなことばかり。カルチャーショックが絶えない。

ところで、コンピューター教室があるデカムハレは、1本の舗装された道路の周りに家が群がる程度の小さな村だが、これでエリトリアでは5本の指に入る都市。首都アスマラから車なら、戦争で完全に森を失った、赤茶けた山々を見ながら40分ほどのドライブで着く。その町の入り口すぐの所に学校がある。ここには孤児1000人が共同生活をしている。8の民族が一緒にいるので、外見もバラエティーに富む。ちなみに、多民族、多宗教が丸で独立を達成したというのも、世界で希に見る。また、エリトリアを象徴する出来事だ。

今学校が始まって3週間ほどになり、初日、あまりの生徒の少なさにどうなるかと思っていた授業も、だいたい軌道に

乗ってきた。生徒は高校生だが、ゲリラ活動をしてたせいで学年が遅れていて、皆20歳を越えている。生徒達のごつ顔には最初圧倒されたが、今は慣れた。1000人の中から、レギュラーズスクールの英語の点数で選ばれた80人を対象にしているので、できる生徒が多く、羨しいといえば、基本的に、皆やる気がある。授業の後、「残って練習していいですか?」といわれることもしばしば。嬉しい限りだ。今の悩みは、できる生徒とそうでない生徒の格差が広がりがつづいて、どうすべきなのか迷っていること。

生徒達は、元EPLFの兵士で、政府からは非常に信頼されている。そのため、政府は彼らを軍隊に欲している。もとゲリラ兵だけに、恐れる事がなく、軍人として適任と考えられているのだ。仕事が見つからなかったら、彼らは軍隊に入るほかにない。しかし、彼らは普通の生活がしたいとのこと。戦争で苦役をなめ、肉親を失ったのだから、当然のことだろう。そのために、このコンピュータースクールは彼らに、オフィスワークができるかもしれない希望を与えている。僕としても毎日彼らと顔を突き合わせているだけに、情がうつって、ただでさえ不利益な立場にいて、かつ辛い立場にいる彼らには、幸せになって欲しいと願う。その手助けができるチャンスが今分にある事が、また前向きになる。このような状況です。また、職業訓練校の支援プロジェクトはこれで終わる訳ではなく、まだいろいろプランがあるもの。ただし資金不足のため、ことな進まないという次第です。エリトリアの若者達のため、みなさんのご支援が必要です。今後とも、よろしくお願致します。